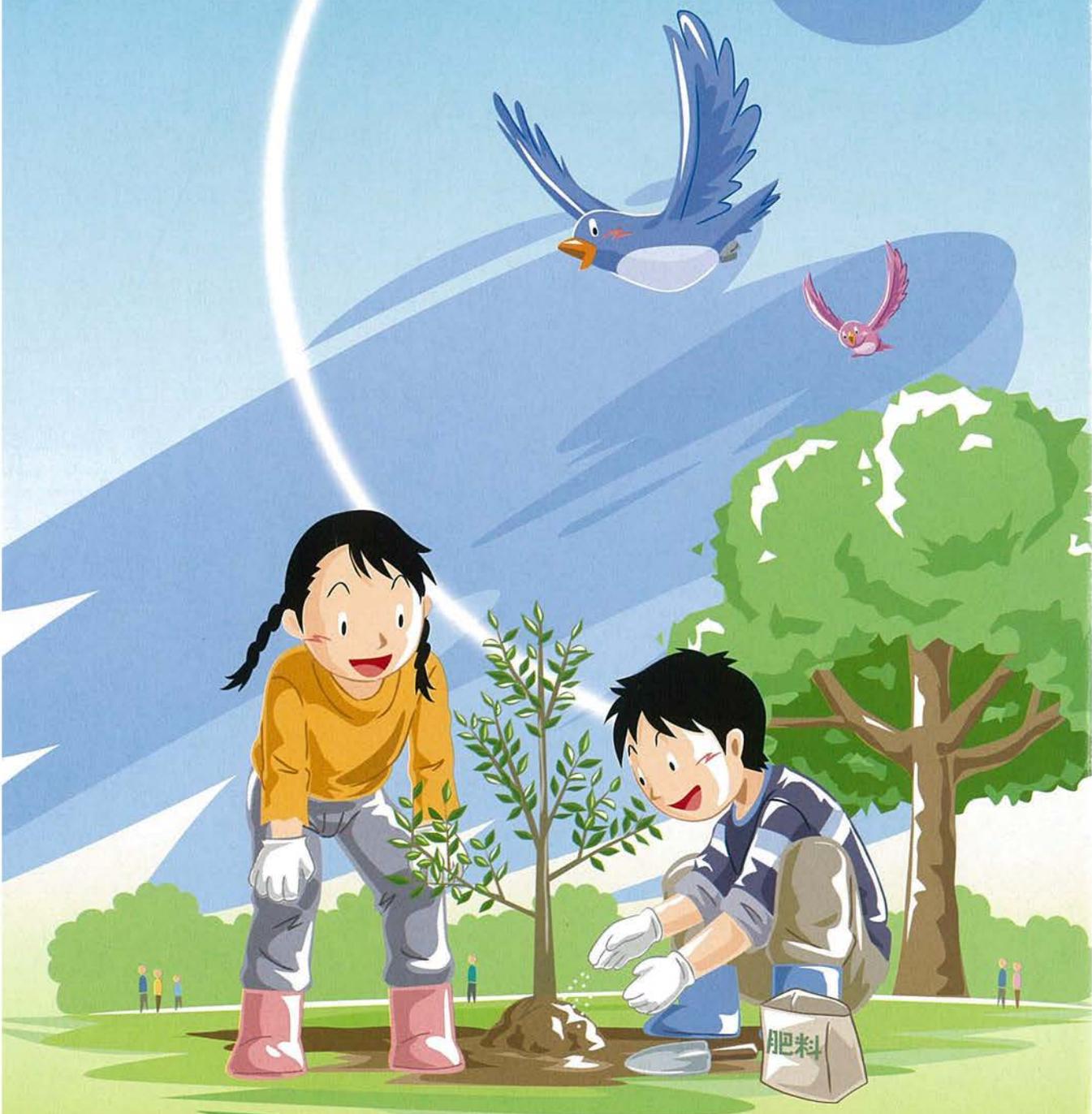


豊かな心を育てる教材

新ふるさととの心

小学校5・6年



香川県教育委員会

豊かな心を育てる教材 新ふるさと的心

【小学校 五・六年】

◆ 夢を追い続けて — 白井二幸 — 1

一―(二) より高い目標を立て、希望と勇気をもつてくじけないで努力する。

◆ 未来にのびる夢ロード 5

四―(三) 身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たす。

◆ 心をつなぐヴァイオリン — 川井郁子 — 9

四―(四) 社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つことをする。

◆ 友だち 19

二―(二) 友達どうし互いに信頼し合い、自分の思いを表現しようとする。

◆ 心に残るたから物 21

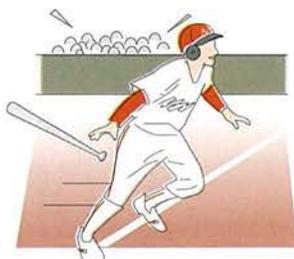
四―(三) 自分の役割を振り返るとともに、責任を果たそうとする。

夢を追い続けて

—白井一幸—

「君の夢は、きつとかなうよ。」

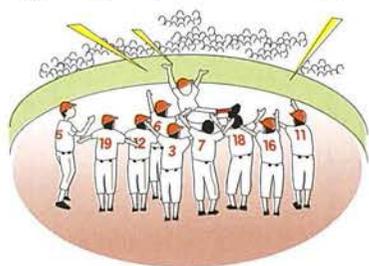
講演会で、ステージ上から語りかける白井一幸さんは、笑顔にあふれ、力強い声をひびかせている。その言葉は、彼自身が、これまで歩み続けた道であり、たどり着いたゴールに他ならないからである。



白井さんは、一九六一年香川県に生まれた。一九八三年のドラフトで日本ハムファイターズに入団。一九九一年には、自身最高の打率でリーグ三位、最高出塁率とカムバック賞を受賞している。一九九七年から日本ハムファイターズの球団職員となり、ニューヨークヤンキースへコーチ留学。二〇〇〇年に二軍総合コーチ、二〇〇一年に二軍監督を経て二〇〇三年からヘッドコーチとなった。

そして、二〇〇六年、北海道日本ハムファイターズは、日本一の栄冠を手にするのである。この喜びの中、選手たちの「やる気」を支え続けたヘッドコーチ白井さんは、自分の人生にとっても大きな実りを感じていた。

というのも、最初の年から、成果があがったわけではなかったのである。コーチたちからの不満や観客からの野次の中も、じっと我慢し、自分の進むべき道を信じ続けたのである。それが、二年目に二位、三年目、四年目連続優勝につなが



ることになる。ここに、どんなひみつがあったのだろう。彼が信じ続けたものは何だったのだろうか。

彼がまず取り組んだのは、選手の「やる気」を引き出すことだった。「やる気」さえ出れば、体はひとりで動くようにもなってくる。そのために、選手に「目標」と「夢」と「元気」を与えることから始めたのである。夢は、もちろん自分の成績をあげること、そして勝つこと、優勝することである。その目標に向かうためには、何をどうがんばりたいのか、練習方法や取り組み方を選手一人一人が考え、書いたり、語ったりしながら、明らかにしていったのである。

たとえ今は上手くいってない状態にあり、そればかりか、そこでどんなに努力してもいっこうに上向かない状態だったとしても、それを乗り越えたところに必ずや大きな喜びがあると信じて「夢」を抱き続けることで、今の苦しみを楽しみに変えられるという信念をもって、白井さんはのぞんだと言う。そして、事実、選手たちは、笑顔で戦い、のびのびとプレーしていったのである。それこそ、勝ちたいという「夢」の力であり、その「夢」に向かって晴れ舞台で戦っているという「元気」であった。そこには、勝ちたいという共通の夢をもつファンの応援の力もあったことを忘れてはならない。

結果を信じて試合にのぞんでも、不安な気持ちには生まれる。白井さんも、選手時代、人一倍努力をするのに、本番に上手く結果を出すことができないことがよくあった。そんな白井さんだからこそ、選手の苦しみがよく分かる。白井さんは、選手時代に自分がかけてほしかった言葉を思い出しながら、

「おまえなら絶対できるぞ。自信をもっていけ。」

と選手たちをグラウンドに送り出すのである。そう声をかけられると、選手たちはみな、笑顔でバッターボックスに立つことになる。その笑顔は、任せてくださいという自信と責任感にあふれたものであった。

そして、練習では、緊張感に負けず、本来の力が発揮できるような心の持ち方についてのトレーニングも取り入れていく。ややもすると

(大じょうぶだろうか。うまく発揮できるだろうか。)

と体も固くなって、不安になりがちなところを、

(大じょうぶ。いよいよ発揮するときがきた。)

とうまくやれそうな気持ちを高めていくのである。そのために、選手のプレーの結果に対しておこらないことを通したのである。コーチたちの我慢の中、選手は固くならずのびのびと一生懸命のプレーを見せるようになる。選手たちが、自分から「やれる」と思える自信をつけていったのである。それは、自分を信じ、コーチを信じ、仲間を信じ、互いの信頼関係を強くしていくことになったのである。

また、自信をつけるための指導は、一人一人のようすをよく見て行つた。

アメリカ大リーグで活躍してきた、一流と言われる新庄剛選手も悩みを抱えていた。ある日、食事をしたとき、

「ぼくは、右うでが強すぎて、だからバッティングがだめなんですよ。」
と打ち明けてきた。

「実は、ずっと君の右うでのすばらしさを感じていたんだよ。その右うでの力を生かしていこうよ。」

と、いつも見ていて思っていたことを伝えた。と、それを聞いた新庄選手の目が、みるみる輝き出したのである。

「だまされたと思って、キャッチャーフライを打つぐらいのつもりで、大きくすくい上げるように、バットを振ってごらんよ。絶対打てるから。」

と白井さんは伝えた。それからというもの、彼は、周囲の人間がふしぎに感じるくらい徹底して、練習を始めたのである。それから、彼は見事なヒットを打ち続けることになる。

新庄選手の右うでが気になりながらも、彼が自分から来ることを待っていたら、心の準備ができた彼の方から近づいてきたのである。

これも新庄選手が、チームの勝利最優先の精神を徹底して貫き、ファイターズ日本一の「夢」を追い続けたからである。こうした白井さんの考え方は、チーム全体に行きわたり、自主性あるチームをつくっていったのである。

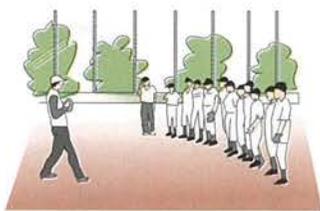


そこに、リーダーとしての人間的な力、心に訴えてくるような愛情を感じずにはいられない。

「ただ野球がうまくなるだけではない。夢をもって取り組み続けることの大切さを伝えていきたい。」

と語る白井さんの笑顔は、野球を始めたばかりの少年のころと変わらない、まぶしい輝きを放っていた。

白井一幸さんは、今もなお夢を追う少年たちやその指導者たちの力とやる気を引き出し続けている。



未来にのびる夢^{ゆめ}ロード



たけしの小学校のすぐそばに川があり、その土手にはアジサイが植えられている。町みんなは、そこを「アジサイ夢^{ゆめ}ロード」とよんでいる。六月には、色とりどりのアジサイの花が咲きほこる町の自慢^{じまん}の場所だ。

六月のある日、たけしは、友達と遊ぶのに、「アジサイ夢^{ゆめ}ロード」にかかる橋の所で待ち合わせをした。早く来たあきらとジュースを飲みながら友達を待っている、あきらが言った。

「来週の日曜日は、アジサイ祭りやなあ。祭りは楽しみなんやけど、その前にするクリーン活動がいややなあ。」

「うん・・・そうやな。」

たけしも、思わずそう答えた。（とにかく暑いし、草がすごいし、手がかゆくなる。みんなもいやなはずや。）

二人は、しばらく橋のところまで待っていたが、友達がなかなか来ないので空き缶^{かん}をぽいっと捨ててむかえに行った。

六月の第三日曜日、アジサイ祭りの日がやってきた。たけしたちの小学校は、一年生から六年生までが、たて割りで分かれて、なかよし班^{はん}を作っている。アジサイ祭りの前に、なかよし班ごとに場所を決めて、家の人も混じって、みんなでクリーン活動をするのだ。たけしは、班長を任^{まか}されているので、

「ぼくたちの班は、この場所のクリーン活動をします。みんなはアジサイの株^{かぶ}の周りの草をぬいで、一・二年生は、ゴミを拾ってください。」

と言うと、みんなでいっせいに活動にとりかかった。とにかく、すごい草だ。少し引っぱたく

らいではぬけないほど、草がしげっている。みんな一生懸命草をぬいたりゴミを拾ったりしているが、たけしは、

「こんな草いくらぬいたってきりがなし……。」
とブツブツ言いながら、あまりやる気がおこらずただ手を動かしているという感じだった。

すると、低学年の子らが、アジサイの根元の草のところから空き缶などのゴミをたくさん拾い見せにきた。たけしは、自分が捨てたのと同じ缶を拾ってきているのを見てドキツとした。

そこへあまり見かけないお姉さんがやってきて、

「この草すごいねえ。手伝うよ。いっしょにぬいてしまおう。」

と、声をかけてきた。そのお姉さんは、草ぬきをしながら、いろいろな話をしてくれた。話を聞いていると、たけしの小学校の卒業生で、今は都会に住んでいるけれど、たまたま今週は帰ってきているのだという。

「今から十一年前に、このアジサイ夢ロードづくりが始まったんだよ。町のシンボルをつくって、地域のみんなが集まる場所にしたっていうわたくしたち小学生の夢を地域の人たちが理解してくれて、いっしょに始めたんだ。」

「えーっ。小学生が言い始めたんですか？」

「そう。草だらけの川の土手に、アジサイを植えて、みんなが集まる夢ロードをつくらうっていう大きな夢なんだけど。それを地域の人たちは、応援してくれて、みんなで力を合わせてつくってきたのよ。毎年少しづつアジサイを植えて、この夢ロードができてきたってわけ。」

「すごいなあ。順調に夢が実現してきたんですね。」

「ううん、そんなことないよ。まず、土手の両側にアジサイを植える『たな』を作るんだけど、





これが大変だったわ。それに、アジサイをさし木でどんどん増やして、苗木を育てなきやいけないし。植えたら、水やりをして、肥料をやって、草ぬきもしなくちゃいけない。枯れたら植樹し直すの。アジサイの株からはなれているところは、地域の人が草刈り機で草を刈るの。毎月最終日曜日が『アジサイの世話の日』になったんだけど、地域の人がたくさんアジサイ・ボランティアになってくれて、何年もかかって、やっとできてきたんだよ。」

たけしは、お姉さんの話を聞いているうちに、小学生だけでなく地域の人みんなで作くりあげてきたアジサイ夢ロードのことを何にも分かっていたなかつた上に、空き缶まで捨ててしまった自分はずかしくなってきた。

そこへ、草刈り機を持ったおじいさんが通りかかった。お姉さんが、

「あーっ。松木さん、お久しぶりです。」

と急に大きな声をあげた。おじいさんも、

「おお。がんばつとるなあ。すごい草の山ができとるやないか。わしも、

若いもんには、まだまだ負けられんけんなあ。草刈りがんばるでえ。あ

っはっはっ。」

そう言つて、むこうの土手の草刈りに行つてしまった。

「松木さん、十一年前と同じせりふやわ。今でもすごく元気やねえ。」

お姉さんがそうつぶやいた。

「松木さんと知り合いなんですか？」

「うん。だつて、松木さんは、夢ロードづくりを始めたときから、ボランティアをしてくれてる人なんだよ。アジサイの世話の日以外も夢ロードに出てきて、草を刈ってくれるの。あれからずつ



と、ボランティアを続けてるんだね。あのころ、たしか七十歳前って言ってたから、今は八十歳になったのかなあ？」

たけしは、アジサイ夢ロードを見回した。きれいにアジサイが咲いている所もあれば、草に囲まれてアジサイが見えなくなってしまっている所、もうすっかり枯れてしまっていてアジサイがなくなっている所もある。たけしは、何ともいえない気持ちになってきた。

たけしは、立ち上がって、班のみんなに叫んだ。

「みんな、あと十分。小学生の力は大きいけん、大人やお年寄りの方に負けずにがんばろう。みんなで夢ロードをつくろう！」

「オッケー。」

「あと十分がんばろう！」

小学生も大人も、みんな汗いっぱいだ。でも、その顔はみんなにこにこしている。草をぬくたけしの手も速まってきた。(後で、夢ロードができてきたわけを、あきら君に話そう。そして、今度のアジサイの世話にいっしょに参加しようとかそってみよう。)

たけしは、この後のアジサイ祭りでは歌う歌を自然と口ずさんでいた。

♪ 大きな 大きな夢のせて 未来にのびるよ 夢ロード ♪



心をつなぐヴァイオリン ―川井郁子―

〔高学年〕



ここは、タイ西部のタムヒン難民キャンプ。

野外ステージが設けられ、その周りには、キャンプに暮らす数百人の人々が、演奏を待ちわびています。

ステージの中央で演奏を始めようとしているのは、川井郁子^{※注1}。日本を代表するヴァイオリニストです。

郁子は、六歳のとき、ヴァイオリンを習い始めました。ヴァイオリンが好きで、夢中で練習をしました。そして、自分の思いや感情を人々に伝えるために、一途に表現し、演奏を続けてきました。

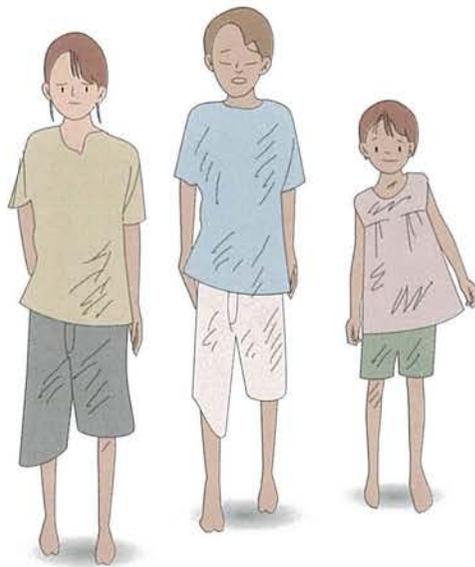
しかし、娘の誕生をきっかけに、郁子の演奏が変わってきました。家族と過ごす日々がかけがえないものになり、娘のちょっとした仕草もいとおしく、いつも抱きしめておきたいと思うようなになりました。娘以外の子どもが、公園で転んだのを見ただけでも、かけよって声をかけることもあり、自分の子どものように大切に思えるようになってきました。そんな気持ちがヴァイオリンの音色にも表れ、優しい心を込めることができるようになってきたのです。郁子は、楽しく、笑いの絶えない日々を過

ごしていました。

ある日、テレビを見ていると、ドキュメンタリー番組で、※注2 タイ西部のタムヒンなんみん難民キャンプで暮らす少数民族カレン族のことが紹介されていました。その映像を見て、いくこ郁子は、はっと息をのみました。電気や水道もない難民キャンプ。着の身着のまままで生活をしている子どもたち。何日も何日も体を洗うこともできない。おなかいっぱい食事をすることもできない。何人もの子どもたちが、病気で命を失っているのです。

それでも、いっしょうけんめい一生懸命生きようとしている子どもたち。これからの自分たちの未来を信じ、必死で勉強に取り組んでいる子どもたち。子どもたちの大きな瞳は、テレビを通して、いくこ郁子をじっと見つめているようでした。いくこ郁子は、胸がぎゅっと苦しくなり、いつの間にか、娘をおもいきり抱きしめていました。

（同じ地球上に生まれながら、ここで暮らす子どもたちには、自由も喜びもないのだろうか。毎日、どんなことを考え生活しているのだろうか。私が、この子たちにできることは何かないのだろうか……）



その夜、郁子は、カレン族の子どもたちのまっすぐな瞳を思い出し、一睡もできませんでした。

何か自分ができることはないかと、友達にも相談しました。

「あなたにしかできないことがあるんじゃないの。」

郁子は一晚考えました。そして、ヴァイオリンを通して活動することを、決心するのです。

郁子は、難民の子どもたちへの援助を目的としたチャリティーコンサートを開催したり、「川井郁子 マザー ハンド基金」も設立したりしました。いろいろな活動をするうちに、実際にタムヒン難民キャンプに行つて、子どもたちの力になりたいと考えるようになりました。まだ、一歳の我が子を日本に残し、不安定な国に行くことを、周囲の人々に反対されました。十分な活動をしているので、そこまですることはないだろうと言う人もいました。しかし、郁子は、テレビで見た子どもたちのまっすぐな瞳が忘れられず、どうしてもその場所に行つて、子どもたちのために何かしたかったのです。





そして、とうとう、十一月十三日。タイ西部のタムヒン難民キャンプに来ることができたのです。子どもたちは、郁子を歓迎してくれました。しかし、苦しい状況を強いられた子どもたちの表情はやはりどこことなく暗く、不安に満ちていました。

いよいよ演奏です。郁子は、大きく深呼吸をしました。自分の演奏が、子どもたちの心に届くかどうか分からないけれど、心を込めて一生懸命演奏しました。一曲目は、バッハの『ガヴォット』です。

郁子の演奏は、木々の間を吹き抜けるさわやかな風のように、一人一人の心の中に、吹き抜けていきました。すると、観客からは、曲の合間に拍手が沸き上がり、子どもたちは目を輝かせながら前へ前へと乗り出してきました。次は、どんな曲を演奏するのかと、じっと舞台を見上げている子、体を曲に合わせて動かしている子。子どもたちの顔に、笑顔がもどってきたのです。その子どもたちのきらきらした瞳を見ているうちに、ヴァイオリンが弾きたくてたまらなかった幼い頃の自分の姿を思い出し、演奏をしているうちに、何とも言えない感情が沸き上がってきたのです。そして、郁子の心も温かさで満たされました。

最後に、ヴァイオリンを弾くことのできるカレン族の男の子と、日本で覚えてきたカレン族の童謡『ユメポタシ』を演奏しました。

ヴァイオリンの音色は、タムヒン難民キャンプに響きわたりました。人々の悲しみを忘れさせてくれる、そして、祖国ミャンマーを思い出させてくれるようなやさしい音色・・・そっと涙を流す大人たち・・・。

いつの間にか、子どもたちは、郁子と男の子の演奏に合わせて、歌を口ずさんでいました。そして、会場にいる全員に歌が広がっていったのです。

会場にいるカレン族の人々が、郁子のヴァイオリンの音色を聴くことで、心が安らぎ、笑顔になりました。

演奏が終わると割れんばかりの拍手が、郁子をまっていました。

「もう一回、もう一回。」

と、子どもたちは、目を輝かせて、郁子にせがむのでした。

思わずいっしょに演奏した男の子を、郁子は、ぎゅっと抱きしめていました。

今まで味わったことのない気持ちだが、心にあふれ出してくることを、郁子は感じました。子どもたちのまっすぐな瞳に、反対に励まされたように感じました。

今までの郁子の演奏は、自分を表現することを最優先させていました。しかし、今の郁子は違います。そう、聴いてくれる人との音の共有体験の大切さを感じながら演奏することができるようになったのです。そして、子どもたちのあふれんばかりの笑顔から、音楽を通して、心を通わせることができると、郁子は、確信するのです。そのことに気づかせてくれたカレン族の子どもたちの瞳を忘れず、これからも、郁子は、ヴァイオリンに心を込めて演奏を続けることでしょう。

〈※〉

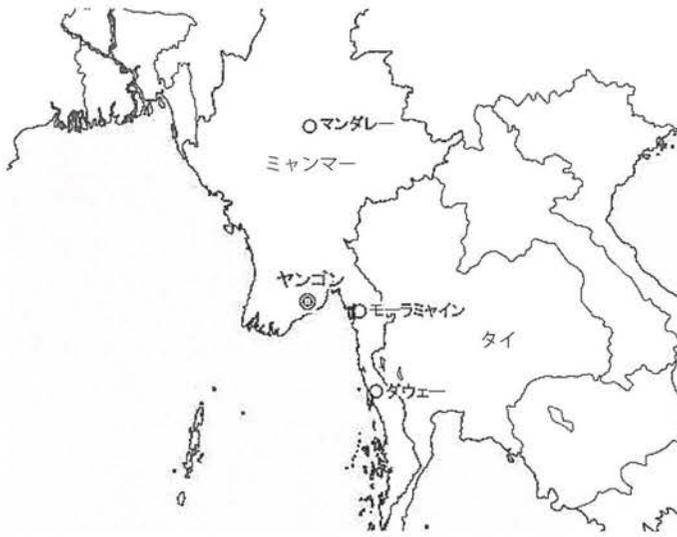
1 川井郁子

香川県高松市出身。東京芸術大学卒業・同大学院修了。現在、大阪芸術大学（芸術学部）教授。ヴァイオリニスト、作曲家。

二〇〇七年「川井郁子マザー・ハンド基金」設立、国連UNHCR協会評議員として、ミャンマー難民キャンプを訪問。二〇〇八年にウガンダの難民キャンプ訪問。

2 タイ西部のタムヒン難民キャンプ

一九四八年以来続いているミャンマー政府軍とカレン族など少数民族の紛争と、ミャンマー国内で起きている人権侵害により、一九八四年よりミャンマー難民がタイに流入し始めました。タイ国内にはミャンマーとの国境近くに九つの難民キャンプがあります。



友だち

〔高学年〕

明子さんとよしさんとわたしは、仲よし三人組であった。

ある日、そうじの時間が始まったときである。教室の後ろで、明子さんがわたしにひそひそとないしょ話を始めた。

「ちよっとちよっと。ときどき、よしさんがあなたの悪口を言ってるよ。」

「えっ。本当？」

「本当やって。ほかのみんなに聞いてごらんよ。わたし、聞きながらはらが立ってきたわ。」

そのとき、よしさんが笑いながら走ってきた。わたしたちは、急にすっとはなれて、そうじを始めた。よしさんが、

「何を話してたの。」

とたずねても、

「そうじのこと。早くそうじをしないと終わらないよ。」

と言って、わたしはごまかしてしまった。

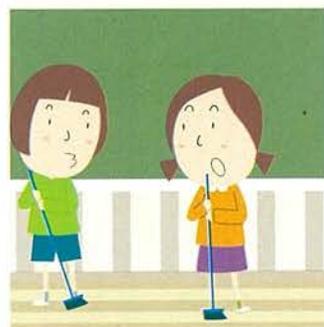
でも、わたしの顔はくもったままだった。

その日の帰り、いやな気分で校門を出ようとすると、前を明子さんとよしさんが楽しそうに話しながら歩いて帰っていた。

「待って！」

と言おうとした言葉を飲みこんでしまった。

そして、わたしは、なぜか逃げるようにかけ出していた。



何日かそんな日が続いた。明子さんやよし子さんがわたしの方を見ると、目が何だかにらんでいるように見える。また、二人が笑っていると、わたしのことを笑っているんじゃないかと心配になる。二人が何をしても気になって気になって仕方なくなってしまうた。

ある日、頭がいたくなつて学校を休んでしまった。その日の放課後、近くに住んでいる道子さんが学校のプリントを届けてくれた。道子さんは、いろいろ学校のことを話してくれた。そして、

「最近、元気がないんとちがう。」
と聞かれた。

わたしは、思わずなみだが出そうになった。そして、これまでのことを道子さんに話し始めた。全部話し終えると何かほっとしたような気持ちになった。

すると、道子さんは言った。

「明日、このことを明子さんやよし子さんに話そう。やっぱり言わなければ……。」

「でも……。」

「わたしもいっしょにいるから。絶対ぜったいに言った方がいいよ。」

わたしは、道子さんの強い口調にびっくりした。

次の日、わたしは、道子さんにも助けられながら、自分の思っていることを全部話してみた。明子さんやよし子さんは口をとがらせるときもあつたが、最後まで聞いてくれた。そして、

「もう一度、三人で仲よくなれる方法を考えてみよう。」

と二人は言ってくれた。



今は、もとの仲よし三人組ではない。前よりもずっと仲よしの四人組になっている。



心に残るたから物

卒業を前にした友子のクラスでは、この一年間の心に残る思い出を一人一人発表することになった。

クラスみんなは、六年生のアルバムを見ながら、どんな思い出を語ろうかといういろいろ考えていた。友子も修学旅行しゅうがくのことにしようか学習発表会のことにしようか、それとも運動会のことに・・・と、悩なやんでいた。

アルバムの一枚一枚には楽しい思い出がいっぱいつまっていた。アルバムをめくったとき、三年生のたまみちゃんからもらった手紙を見つけた。友子の学校では、一・四年生、二・五年生、三・六年生がいっしょになっていろいろな活動をしている。本当のことをいうと、三年生は言うことをきかないし、ふざけてばかりで友子はいっしょに活動するのがいやだった。

そうじのときなど三年生といっしょだと、机は重いからといって運ぼうとしないし、

「床ゆかをはいて」



と言ってもすみの方まではけていなくて、いつも後からまたやらなくちゃいけなかった。

担当の先生からは、いつも

「まだ、そうじ終わっていないの。さっさとしないと時間ないわよ。」

と、注意を受けてばかりだった。これが、同じクラスの人とやっているのならとつくに終わっているのにといいいな思いをしていた。

そんないやな思いばかりをしていたところ、三年生のたまみ

ちゃんから一通の手紙をもらった。



友子お姉ちゃんへ

お姉ちゃん、いろいろなことを教えてくれてありがとうございます。わたしはお姉ちゃんとペアになれてうれしいです。

なわとびの練習をしているとき、わたしが二重とびを教えると言うと、二重とびができるようになるには、手首をはやくまわす練習をするといよいよと言ってくれたり、手作りのなわとび学習カードを作ってくれたりしました。だから、お姉ちゃんのおかげで二重とびが十回とべるようになりました。お姉ちゃんありがとう。

この間のそうじのとき、お姉ちゃんが机を運んでねと言ったのに、わたしは重いからいやと言ってやりませんでした。その後すぐ先生が来てお姉ちゃんは先生にしがられてしまいました。本とうは、わたしが悪かったのに。ごめんなさい。

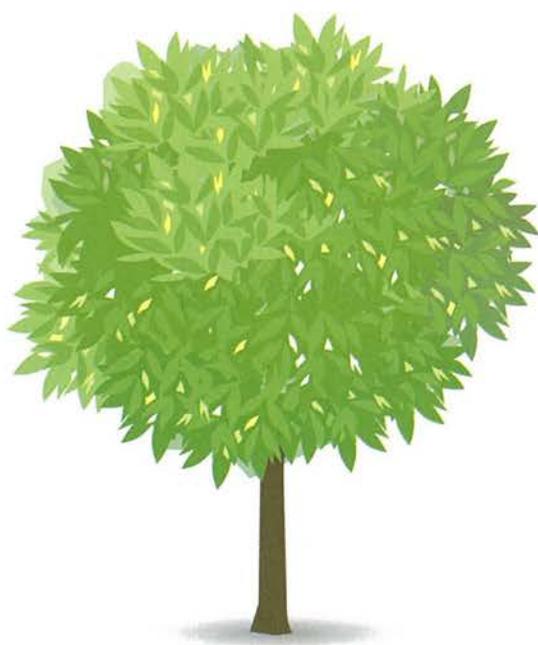
わたしも六年生になったら、お姉ちゃんのような上級生になりたいと思います。

卒業しても、わたしのことをわすれないでください。わたしもお姉ちゃんのことをわすれません。

たまみより

わたしは、いつの間にか最上級生としての自分の行動をふり返っていた。そんな思い出をみんなの前で語りたかった。わたしは、たまみちゃんからの手紙を通して、最上級生として学んだことや実行したことを発表することにした。そして、卒業までの残り少ない日々によりよい思い出づくりをするために何ができるか考えていこうと思った。





5 年 組	
6 年 組	